も早く母親を捜し出さなければと躍起になっているように見え、発見者の事情聴取などにそうそう長い時間を割くわけにもいかないのかも知れなかった。

母親――隣室の女は、捜索するまでもなくその数時間後に見つかった。薬物中毒の禁断症状で歯をガチガチ鳴らしながら、大家の庭の藪の中で雨にずぶ濡れになってうずくまっていたのだった。

保護責任者遺棄罪で警察に連行された女は、その日のうちにあっけなく四年ほど前にも女の子をひとり死なせていることを自供した。雨のあがった翌日から自供にもとづいた捜索が行われ、荒れ果てた大家の庭の片隅、行雄の部屋の窓から見えたあの深緑色の繁みのあたりから、生後一年と思われる女児の白骨死体が発見された。

――だって……、いちばん近いもん。

庭での騒ぎを窓ごしにぼんやりと見ながら、行雄はサキの呟くように言ったひと言を思い出していた。

アキが一命を取りとめたこと、もう数時間発見されるのが遅ければおそらく死に至っていたであろうことなどは、その後大家の口から聞かされた。遺棄致死罪で再逮捕された女には結婚の経験はなく、死体で発見された女児とアキも父親は違い、ふたりとも戸籍さえ持たぬ子どもだったという。女はもう六年以上このアパートに居続けていたが、ふたりも

の子が産まれていたことさえ大家はまったく知らなかったという。

「昔はねえ、あたしたちも店子さんの世話するの楽しみにしていたようなところがあって、だからちょくちょくこっちの様子を見に来たりもしていたんだけれどねえ……」

七十はとうに超えているであろう大家の妻は、残念そうに言った。

「でも最近の店子さんは干渉されるの嫌がるし、あたしたちも年齢とっちゃったし……。それでも昔みたいに様子見に来てれば、こんなことにはならなかったのにねえ……」

彼女はそう言って、少し涙ぐんだ。自分の家の庭先に死体を埋められた嫌悪感よりも、たった一年ほどの生しか味わえなかった子どもに対する憐憫のほうが、彼女の中ではずっと大きいようだった。

たった一年の生――。行雄は、はじめてサキの絵を描いてやったときに、サキが涙を流して喜んだことを思い出す。自分自身さえ見たことのない、あるべきだった未来の自分の姿。サキがあんなに喜んだのは、それを目にすることができたからだ。

サキはもう二度と行雄の前にはあらわれないだろう。描きかけのままになっている最高の出来ばえの絵のことが胸をよぎる。

――まだ、描き終わってなかったんだぜ、サキ……。

心の中でだけ呟き、そっと繁みに目をやってから、行雄は短いあいだだったが世話になったと大家の妻に礼を述べた。